

Participatory Approach の試みに向けて—附属中学校生による小学生への英語の絵本の読み聞かせの実験的授業— (第1報)

山崎友子・菅野弘

はじめに

「実践的コミュニケーション能力」の育成という今日の英語教育の一つの目標に向けて、コミュニケーション能力そのものについての研究およびそのための指導方法・教授方法が追及されている。教授方法として、communicative approach などが注目され、task-based approach も実践されることが多くなった。しかし、これまでの教授法はそのほとんどが教室内での擬似的言語活動に留まっている。そこで、本論では、英語教育の中の言語活動を意味を持つ真正の言語活動として実施する participatory approach に基づく附属中学校での実験的授業を報告する。

問題の所在

Hymes (1972) 以降、言語についての知識だけでなく言語を使用するのにどのような能力が必要か研究されてきた。Canal & Swaine (1980)の提唱する4つの下位分類 (grammatical competence, discourse competence, socio-linguistic competence, strategic competence) からなるコミュニケーション能力理論は一般にも広く知られ、文部科学省指導要領もこの理論に基づいて指針を示している。

しかしながら、目標言語を使用するところまで学習者を「連れて行く」ことが学校教育の現場の課題の一つとしてある。使用した言語の質の向上以前の問題を抱えた日本の中学生を対象としたとき、Canale & Swaine のコミュニケーション能力の定義は、指導の指針として十分ではない側面もある。コミュニケーションを行おうとする意欲・態度そのものに注目することが必要である。また、実生活での言語活動にあたり教室内での擬似的言語活動を転移させることも課題となっている。

そこで、本研究では、学習者を言語使用の場面に「連れて行き」、現実の生活での言語活動での言語使用を促す指導法として Participatory Approach を取り上げた。この指導方法の背景となるコミュニケーション能力理論としては、BICS (Basic Interpersonal Communication Skills) と WCT (Willingness to Communicate) を参考にした。BICS とは、基本的な対人コミュニケーション能力であり、この基盤の上に CALP (Cognitive Academic Language Proficiency) が発揮され、コミュニケーションが成立するという。ペーパー・テストで測られ

るのは CALP であるが、実際の言語使用場面では、BICS がなければ CALP は表現されない。BICS はコミュニケーションを形あるものにする原動力である。WCT(Willingness to Communicate)は他者と関わり、コミュニケーションをもととする各個人の傾向としてその概念が規定されている。

... the tendency of an individual to initiate communication when free to do so.
McCroskey & Richmond (1987)

本研究では、McCroskey(1992)による、心理的距離、話題、場面の堅苦しさを要素として WCT を測定する 20 項目からなるアンケートを、10 点法に修正して用いた。

Participatory Approach とは

Participatory Approach (参加型アプローチ) は、実際に学習者が真正の言語活動に参加することを通して対象言語を習得していこうとするものである。Larsen-Freeman (2000) によると、1960年代にブラジルの社会経済的に恵まれない層の子ども達への国語教育として Paulo Freire が開発していたものが、80年代になり言語教育の中で注目を集めるようになった。Freire は子ども達とのダイアログを通して、子ども達の興味・関心を把握し、学習者である子ども自身にとって意味のある内容から教授を始めた。ある意味では内容中心のアプローチといえるが、内容中心のアプローチでは、内容は教科の項目として選択され教授されるのに対し、Freire のアプローチでは教授される「内容」は学習者の生活の中の問題に基づいて選択され、学習者が行動を起こし決断をするというように自らの生活の作りコントロールできるような力をつけさせることを目標としていたという。

学習理論に「正統的周辺参加論 (LPP: Legitimate Peripheral Participation)」(レイブ、ウェンガー)がある。徒弟制の中でどのように学びがすすんでいったかの研究から、学びが対象としてあるのではなく、行為として参加する中で学び取られていくこと、学ぶという行為は文化的実践そのものであり、学習者はその正統的参加者であることを明らかにしたものである。Participatory Approach の考え方はこの学習理論と重なることが多い。Freire は学習内容を「学ばれる対象」として据えるのではなく、学習者の生きている世界の中から選ばれ、生きることおよび生きている世界に返っていく。学習者は学習内容の中で学び、そして生きているのである。したがって、このアプローチの実践にあたっては、学習者

を文化的実践の正統的参加者とすることが要点となる。

Task-based language learning のタスクとして、“Welcome Party” への参加が課せられたとする。学習者にそれぞれの役割が与えられ (例えば、「社会的な教師」や「内気な学生」など)、時・場所などのセッティングの指示がなされ、教室の中で仮定の party が開始され、その中で言語活動を行うことになったとする。この場合、学習者は目標言語を鸚鵡返しに使うのではなく、相手を見つける、相手に応じたトピックを探す、相手にふさわしい言語のレジスターを考える等々、様々なコミュニケーション能力を駆使して言語を使用することになる。しかし、この活動が歓迎する対象を仮想のものとして、授業で行われれば、この言語活動はあくまでも擬似的言語使用場面であり、Participatory Approach とは呼ばない。しかし、例えば、新任の教師を招き、歓迎する対象が現実存在するセッティングを教室の中に創り出し、Welcome Party への参加という課題を与えれば、たとえ教室内の活動であっても Participatory Approach として実践することが可能である。

附属中学校における実験的授業

1. 実験授業の提案

岩手大学教育学部附属中学校では、「確かな学びの創造～『考えること』を高める学びを通して～」を研究主題として、全教科を通して『考える力』を総合的に高めていくことが目指されている。英語科においては、1単位時間内でさまざまな工夫をし、タスク活動に注目をした取り組みが続けられていた。この研究をさらに発展させるものとして、山崎から3つの観点と英語の絵本の小学生への読み聞かせという実験授業を提案した。

- 1) 「受動的に学ぶ人」から「能動的に関ることから学ぶ人」へ
 ⇒「考える」場面、「感じる」場面、meaningful な場面を作る。
 ⇒教師の発問に insight questions (内容理解を深める質問) を含ませ、discussion へ導く。
- 2) Interaction を活用する。(L1 の習得、小学校英語活動からの示唆を踏まえ)
 ⇒presentation の中にも教師から生徒への語りかけや質問を入れ、interactive なものにする。
- 3) 学習を教室内の学習として閉じ込めるのではなく、「社会に参加する」一つの活動とする。
 ⇒生徒の学びの一場面が、社会的にも意味あるものとなるように設定する。

⇒附属小学校へ出かけて、絵本の読み聞かせを行う。

この提案を受け、附属中学校菅野教諭が中学校1年生を対象として、6時間からなる単元『小学生に *Corduroy's Best Halloween Ever!* の読み聞かせをしよう』を構想し、実践した。

2. 授業計画

実験授業は表1のように、6時間で構成された。

表1

時間	授業内容
1時間目	教師による絵本の読み聞かせ
2時間目	Halloween についての学習
3時間目	読み聞かせの際に用いる表現作文
4時間目	読み聞かせの練習、事前指導
5時間目	小学生との合同授業
6時間目	振り返り

5時間目は岩手大学教育学部附属小学校6年生との合同授業であった。その授業展開を表1に示す。

表2 *Corduroy's Best Halloween Ever!* を小学生に読み聞かせる授業展開

段階	学習内容	学習活動	研究に関する留意点、教材・教具
導入	1. 自己紹介 2. 活動①	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全体で中学生（代表1名）が簡単な挨拶と学習についての紹介をする。 ・ 3分程度、簡単な活動を行う。デイズニ 	CD

			ロウイン・ハッピーホーンテッドパレード (一部)	
展開	3. グループ ング 4. 絵本の読 み聞かせ 5. Q & A 6. 活動②		<ul style="list-style-type: none"> 小グループ (中学生 2 : 小学生 1 ~ 2) に分かれる。その後、グループ内で自己紹介。 中学生による絵本の読み聞かせ。 内容について、簡単に Q & A を行う。 絵本に出てきた活動 Apple Bobbing を行う。 	絵本 活動セット一式 *事前に中学生が作成し持参
終結	7. 感想発表 8. あいさつ		<ul style="list-style-type: none"> 小学生・中学生代表に簡単に今日の感想を発表してもらう。 終了のあいさつをする <p>授業後、感想の記入を行う。</p>	

実験授業は、Halloween の翌日に行われた。初めての試みで、小中学生ともいうきうきする気持ちと戸惑う気持ちの両方が見られた。

次報に向けて

どのような英語教育が実践的コミュニケーション能力の育成に有効なのであるか。外国語の習得は多様な要素を含んでいる。第2言語と第1言語との関係は、学習とは、記憶とは、情報処理は、社会文化的振る舞いは等々、様々な領域にまたがっている。何か一つ、最も有効な方法論があると考えることには無理であろう。外国語教授法概論にあたるテキスト “Techniques and Principles in Language Teaching” (Larsen-Freeman, 1986)は、The Grammar-Translation Method から The Communicative Approach まで8つの教授法を紹介してい

るが、2000年出版の改訂版では、“Content-based, Task-based, and Participatory Approach” という章が追加され、Participatory Approach が新たに紹介されている。今後の実践・研究が待たれる教授法である。

附属中学校との連携により実現することができた Participatory Approach (参加型アプローチ) の実験的授業からは、参加生徒からの WTC アンケート、実験授業への感想を得ることができた。次報において、データの分析および考察を行っていきたいと考えている。

参考文献

- 菅野弘. 2007. 第57回全国英語教育研究大会(全英連福島大会) 研究発表資料「Speaking の指導とその評価」
- 文部科学省. 1998. 『中学校学習指導要領』 東京：大蔵省印刷局
- レイブ、ウェンガー. 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』 (翻訳：佐伯胖) 産業図書.
- Hymes, D. 1972. On Communicative Competence. In J. B. Pride and J. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics* (269-85). Harmondsworth: Penguin.
- Larsen-Freeman, D. 1986. *Techniques and Principles in Language Teaching*. Oxford University Press.
- Larsen-Freeman, D. 2000. *Techniques and Principles in Language Teaching*, second edition. Oxford University Press.
- McCroskey, J. C. 1992. Reliability and validity of the willingness to communicate scale. In *Communication Quarterly*, 40, 16 – 25.
- McCroskey, J. C. & Richmond, V. P. 1987. Willingness to communicate. In J. C. McCroskey & J. A. Daly (Eds.), *personality and interpersonal communication*, 129 – 156. Newbury Park, CA: Sage.

(岩手大学教育学部英語教育科・岩手大学教育学部附属中学校英語科)